

メタフォリカル・コンピテンス研究の現状と問題点 及び日本語教育への導入

鐘勇 李相穆

九州大学 比較社会文化学府

zhongyong07051980@yahoo.co.jp ; sangmok@flc.kyushu-u.ac.jp

1. はじめに

応用認知言語学的アプローチは英語習得・教育を皮切りに始められたが、今日では日本語習得・教育の分野にも及んでいる(森山新 2007)。その中で、言語能力やコミュニケーション能力とほぼ同等の重要性を持つと考えられるメタフォリカル・コンピテンス (Metaphoric Competence, 以降 MC) に関する研究は、寡聞にして、まだ日本語教育では見られない。そこで本稿では、応用認知言語学の潮流に応じ、これまでの MC 研究の現状や問題点についてまとめながら、日本語教育への導入を提案したい。

2. メタファー

認知言語学の発展とともに、メタファー理論も大きな発展を遂げてきた。Lakoff and Johnson (1980) の *Metaphors We Live By* は、メタファーのイメージを一変させた。彼ら(1980:5)は、メタファーの本質はある事柄を他の事柄を通して理解し経験することだと解釈し、「概念メタファー (conceptual metaphor)」を提唱し始めている。概念メタファーは、①構造のメタファー、②方向づけのメタファー、③存在のメタファーの3種類に分かれる (Lakoff and Johnson 1980: 14-68, 谷口一美 2003: 11-30)。またその後、Lakoff(1987)と Lakoff and Johnson(1999)は、概念メタファーをもとに「メタファー写像理論」を提案した。メタファー写像からみるメタファーとは、起点領域(source domain)から目標領域(target domain)へのイメージ・スキーマの写像である (谷口一美 2003: 45-53)。

3. メタフォリカル・コンピテンス研究の現状

3.1 メタフォリカル・コンピテンスの定義

一番最初にメタフォリカル・コンピテンス (MC) という言葉を使った研究としては、Gardener and Winner (1978)、Pollio and Pickens (1980) 及び Pollio and Smith (1980) が挙げられる。それは大抵、子供のメタファー表現への理解力、メタファー表現の有効性についての説明力、新しいメタファー表現の産出力、更に、新しいメタファー表現の愛用度などを指していた。その後、Danesi(1992)は、第二言語習得の視点から、文法能力とコミュニケーション能力と平行し、MCという概念を提唱し始めている。同氏(1992)によると、MCは主にメタファー表現の理解力と産出率に反映されている。また、Littlemore(2001)は、(a)オリジナルなメタファー表現の産出力、(b) メタファー表現を理解する際の熟練度、(c)メタファー的な意味の識別力、(d) メタファー的な意味を識別するスピード、という4つの要素から構成しているとまとめている。更に近年、王寅 (2007: 495) など、MCの内容について述べている。

これまでMCの定義は、まだまとまっていないが、その殆どはメタファー表現の理解力と産出力に焦点を当てている。

3.2 メタフォリカル・コンピテンス養成の重要性と可能性

メタフォリカル・コンピテンス (MC) についての研究が進んでいるが、果たして MC は学習者にとってどれほど重要な存在だろうか。まず、Danesi(1992, 1995)、Danesi and Mollica (1998)、Kecskes and Papp (2000) などは、メタファー的にディスコースをプログラムするのは母語話者の基本的な特徴であ

るため、MC は生粋の目標言語を習得する際の鍵であると主張している。また、Littlemore and Low (2006) によれば、MC は学習者の文法能力、談話能力、語用能力、社会言語能力及びストラテジー能力に貢献でき、第二言語習得の初級から上級までの言語学習、指導法及びテストに深く関わっている。他には、Low (1988)、厳世清 (2001)、王寅・李弘 (2004)、胡壮麟 (2004: 131) など、MC の重要性について議論を行っている。

MC は言語習得における様々な面に寄与でき、その重要性はいくら強調しても強調しすぎることはない。ところが、MC という能力は果たして養成できるものか、どのように養成するか。この問題をめぐっていくつかの研究が進んだ。

先駆的な研究としては、Kövecses and Péter (1996) が挙げられる。彼ら (1996) はまずイディオムから「up」と「down」を含めた動詞連語を見つけ出し、受験者を2組 (A組とB組) に分けた。それから、A組の学習者には暗記によって動詞連語を学習させるのに対し、B組には方向付けのメタファー (HAPPY IS UPなど) に関する解説を与えた。その結果、B組の成績はA組より著しく高くなり、MCの養成はイディオムの学習を促せることが分かった。その後、Deignan, Gabrys and Solska (1997)、Boers (2000)、Mahmood and Mohammad (2006)、王曉磊 (2009) など、MC養成に関する実証研究を行ってきた。Kövecses and Péter (1996) をはじめとする様々な研究に、MC養成の有効性と可能性が示されている。

3.3 メタフォリカル・コンピテンスと概念的流暢性

Danesi (1992) は、Lakoff and Johnson (1980) の概念メタファー理論に基づき、概念的流暢性理論 (conceptual fluency theory、以降CF理論) を提唱し始めている。同氏 (1992: 493, 2000: 42) はCFとMCをほぼ同一視し、CFを次のように定義している。

「概念的流暢性 (CF) とは、メタファー表現を通して第二言語の概念体系を知り、言語における深層的な概念構造とそれを反映している表層構造 (語彙と文法) を正しく結びつける能力である。」

CF理論によれば、言語体系 (linguistic system) の背後には、それに対応する概念体系 (conceptual system) が存在している。ゆえに、第二言語習得の際に、言語形式よりも、言語に潜む概念体系をマスターすることが重要である。(Danesi 1992, Danesi 1995, Danesi and Mollica 1998) また、近年、Danesi (2000) は、CF理論を発展させ、CFに至る鍵としての概念的再編 (conceptual reorganization) を提唱している。

3.4 メタフォリカル・コンピテンスの測定

第二言語学習者向けのオリジナルな MC 測定用テストを作成し、MC について考察した研究としては、主に Trosborg (1985)、Danesi (1992)、Russo (1997)、Littlemore (2001)、姜孟 (2006)、丁川 (2007) などが挙げられる。例えば、Russo (1997) は、イタリア語学習者を対象に、メタフォリカル密度 (MD) の角度から彼らが産出した作文と会話について分析した。また、学習者に、メタファー表現の文化的適切性について判断させ、目標言語における概念体系の習得程度について調査した。その結果、学習者のメタファー表現の産出力も目標言語における概念体系の習得程度も低いということが明らかになった。Russo (1997) に加わり、他の研究における MC 測定も、測定法がそれぞれ異なるが、殆ど第二言語学習者は MC に欠け、教師からの更なる指導が必要であることを示している。

3.5 メタフォリカル・コンピテンスとそれに関連する変数との相関研究

近年、MC とそれに関連する変数との相関研究も萌芽した。例えば、趙蓉 (2003)、呂晶晶 (2004) 及び王謹 (2006) は、MC と言語能力の相関について研究した。次に、Johnson and Rosano (1993) は MC と英語学習者の認知スタイル及びコミュニケーション能力の相関について考察した。最後に、Littlemore (2001) は、MC と認知スタイル、コミュニケーション能力、性別及び学習時間数との相関の解明を試みた。

以上、MC に関する様々な研究を概観してきた。学習者の MC 養成は重要かつ可能であることなどが明らかになった。

4. メタフォリカル・コンピテンス研究における問題点

MC 研究に関しては、主に次のような問題点が残っている。

(1) MC の定義について

Lakoff and Johnson (1980)、Danesi (1992, 1995, 2000) 及び Danesi and Mollica (1998) により、メタファーも MC も既に概念レベルの問題になってきた。MC を論じる際には、従来の比喻表現（構造のメタファー及びそれによる下位メタファー表現に相当する）に加わり、方向付けのメタファーや存在のメタファーによる下位メタファー表現をも考慮に入れる必要があると考えられる。しかし、これまでの MC の定義は、殆ど従来の比喻表現しか取り扱っていない^⑥。即ち、MC の一部しか把握していない。

(2) MC 測定用テストの未統一

これまでの実験に用いられた MC 測定用テストはまだ統一されておらず、測定のディメンションも様々になっている。例えば、Trosborg (1985)、Littlemore (2001) などではメタファー表現の識別力、産出力、理解力及び愛用度などについて測定しているが、Danesi (1992)、Russo (1997)、Kecskes and Papp (2000) などは、作文や会話の中のメタフォリカル・密度 (MD) に焦点を当てている。

(3) 母語の転移

MC 測定は、まだ母語の転移の影響に十分な関心を寄せていない。Russo (1997) と丁川 (2007) を除けば、Trosborg (1985)、Danesi (1992)、Littlemore (2001)、姜孟 (2006) などあまり母語の転移について考察していない。

(4) 相関研究の不十分

3.5 でも見たように、MC とそれに関連する変数との相関研究は進んでいるが、まだ数量的に少なく、研究の方法と内容も様々である。

5. 日本語教育へのメタフォリカル・コンピテンス研究の導入

MC 研究は始まったばかりで、まだ多くの問題点があるが、それが言語習得において大きな役割を果たしていることは、既に明らかにされた。ここでは、これまでの MC 研究の現状と問題点をもとに、次の流れで MC 研究を日本語教育に導入することを提案したい。

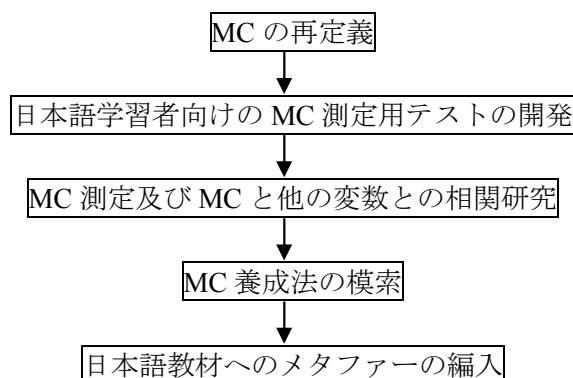


図1 日本語教育への MC 研究の導入

(1) MC の再定義

メタファーが指す内容は概念メタファーまで広がってきた。また、言語体系の背後にはそれに対応

する概念体系が存在することも明らかになった。それゆえ、MC研究を日本語教育に導入するにあたっては、MCの内包を広げ、各概念メタファー（構造のメタファー、方向付けのメタファー、存在のメタファー）を考慮に入れ、学習者の全面的なMCを考察する必要がある。

（２）日本語学習者向けの MC 測定用テストの開発

MC の定義に従い、これまでの Russo (1997)、Littlemore(2001)、姜孟 (2006) などのテクニックを参考に、妥当性と信頼性の備わった MC 測定用テストを開発する。

（３）MC 測定及び MC と他の変数との相関研究

開発された MC 測定用テストで日本語学習者の MC を測るとともに、Littlemore (2001)、王謹 (2006)、Johnson and Rosano (1993)などを参考に、MC と言語能力、コミュニケーション能力、認知スタイル、性別及び学習時間数などとの相関を解明する。

（４）MC 養成法の模索

王建卿 (2006) や鞠晶 (2009) などの理論的な討論及び Kövecses and Péter (1996)、Boers(2000)、Mahmood and Mohammad (2006)などの実証研究を参考に、日本語学習者向けの MC 養成法を開発する。

（５）日本語教材へのメタファーの編入

董宏樂・徐建・梁育全 (2003) や Danesi (1992)が指摘しているように、既存の外国語教材は殆ど概念メタファーに触れていなく、メタフォリカル・密度 (MD) も非常に低い。今後、沈黎 (2001) や Low (1988)などの知見を参考に、メタファーについての内容をも日本語教材に編入することが重要であると考えられる。

6. 終わりに

メタファーは、我々の言語活動のみならず思考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところに浸透している (Lakoff and Johnson 1980 : 3)。メタファーを無視するのは、母語話者の能力の大部分を無視することに相当する (Danesi and Mollica 1998)。学習者の MC 養成は、既に第二言語教育において欠かせない一環となってきた。

本稿では、MC 研究の現状や問題点についてまとめたうえで、日本語教育への MC 研究の導入を提案した。今後、日本語教育においても、MC の研究が花を開き実を結ぶことが望ましい。

主な参考文献

- Boers, F. (2000) .Metaphor awareness and vocabulary retention. *Applied Linguistics* , 21(4) , pp. 553-571.
- Danesi, M. (1992) .Metaphorical competence in second language acquisition and second language teaching: the neglected dimension. In Alatis, James E. (Eds.), *Language Communication and Social Meaning*. Washington DC: Georgetown University Round Table on Language and Linguistics, pp. 489 - 500.
- Danesi, M. (2000) .Semiotics in Language Education. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) .*Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, Chicago and London. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) (1986) .*レトリックと人生*. 大修館書店.)
- Littlemore, J. (2001) .Metaphoric Competence: A Language Learning Strength of Students With a Holistic Cognitive Style. *TESOL QUARTERLY*, 35 (3), pp. 459-491.
- Littlemore, J. and Low, G. (2006) .Metaphoric competence and communicative language ability. *Applied Linguistics* , 27(2) , pp. 268-294.
- 森山新 (2007) . グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学. 研究年報, 3, お茶の水女子大学比較日本学研究センター, pp. 111-117.
- 谷口一美 (2003) . 認知意味論の新展開 : メタファーとメトニミー. 研究社.